

はじめに

本報告書は、平成 20 年度に岡山大学文学部プロジェクト研究経費を得て実施した共同研究「近代アジアにおける表象観念と文化」の研究成果の一部である。

具体的な研究成果の提示に先立ち、研究メンバー、研究目的と意義、今後の研究の発展可能性等について述べて置くことにしたい。

【研究メンバー】

鐸木道剛：哲学・芸術学専修コース

渡邊佳成：歴史文化学専修コース

遊佐 徹：言語文化学専修コース（研究代表）

【研究目的と意義】

このプロジェクトは、日本、中国、東南アジアの「近代」を表象文化研究の観点から捉え直し、そこに現われる共通性と独自性の比較検討を通じて、新たなアジアの「近代」像の提示を目指すものである。

時間的に先行し、空間的に拡大する西洋の「近代」との接触によってもたらされたという性格を強く持つアジアの「近代」の形成のドラマを解明するために、従来の歴史的、政治思想史的アプローチに加え、諸地域における新たな表象文化の成立過程とその実際に注目して研究を進めてゆくの、この研究プロジェクトの最大の特徴である。

その際、特に、見る／見られる、見出す／見出されるの関係から産み出される新たな自己－他者認識の成立（例えば、国旗、国歌等の自己イメージの作成、博物館、美術館等の展示システムにおける自己確認と他者の眼、グローバル化のなかでのイメージ戦略……）に着目しながら研究を進めることによって、上述の研究目標を達成することを目指すことになるだろう。

【研究の発展可能性】

研究の目的と意義欄においても述べたように、本プロジェクトは、極めて独創的なテーマ設定に基づく試みであり、近代文化研究の新たな地平を開く可能性を秘めたものであるといえる。

この試みを継続し、また内容的に充実したものとするために、同一メンバーによって、平成 21 年には「東西宗教交流史における表象観念と文化」、平成 22 年度には「近代展示思想における表象観念と文化」という研究プロジェクトが生まれ、研究の進展が図られている。将来的にはこれら複数のプロジェクトによって得られた研究成果を書籍化することを目指している。